小金井市男女共同参画情報誌

かたらい

53号
2021 春

特集 『男らしさ』について考える

p2 なぜ今『男らしさ』が問題か　ー「らしさ」というバイアスー

p3 コラム 「生きづらさ」と“特権”の狭間に
清田 隆之さん
（文筆業／恋バナ収集ユニット『桃山商事』代表）

p4 子育てにおける「男らしさ」とは？
インタビュー
弁護士　太田 啓子さん

p6 小金井で働く
『オーブン・ミトン』
オーナーパティシエ　小嶋 ルミさん

p8 第３４回こがねいパレット
ダメでいい、ダメがいい。
ーありのままを認めれば子どもたちは最高に輝くー

p9 女性しごと応援テラス 多摩ブランチの紹介

p10 小金井市パートナーシップ宣誓制度

特集

『男らしさ』について考える

なぜ今「男らしさ」が問題か ―「らしさ」というバイアス―

かたらい編集委員より

はじめに

２０２１年の初めに駅伝をテレビで見ました。最後の競り合いはすごかったのですが、その時、監督が選手に、「男だろ。頑張れ！」と檄を飛ばしていて、この時にふと、女性選手だったら、「女だろ。頑張れ！」とこの監督は言っただろうかと考えました。もちろん、一般的に「男性だから」「女性だから」という言う方はあります。

しかし、最近、新聞や雑誌などで「男らしさ」について新たに注目されており、「アンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み）※注」を断ち切るのは、難しいことだと思わされました。

２００１年発行の「かたらい」17号でも「男らしさ・女らしさ」について特集をしていましたが、今、改めて「男らしさ」とは何かについて考えてみたいと思います。今回の特集では特に子育てに焦点を当て、弁護士の太田啓子さんに子育ての視点から男の子の「男らしさ」についてインタビューし、文筆業の清田隆之さんからはコラムをいただきました。

1．有害な男らしさ

「男らしさ」というと、涙を見せない、たくましい身体、女性を守る、食事を奢るべきと思っていたり、「女性は弱い」「男性らしくない」などと性別で相手を決めつけてしまうことがあります。この中に周囲に影響を及ぼす「有害な男らしさ（トキシック・マスキュリニティ）」と言われるものがあり、女性への性的な言動により不快感を与えること（セクシュアルハラスメント）や、男性に本人の意に反し男らしさを要求する（パワーハラスメント）などもそのひとつかもしれません。

これらを悪いことと意識せず、当たり前と思ってしまうことが問題で、アンコンシャス・バイアスと言われています。これは男性と女性の両方が持っていることで、女性も男の子を育てる時に、何気なく「泣いてはいけない」や「強くなければならない」と言ってしまっているのではないでしょうか。

2．アンコンシャス・バイアス

アンコンシャス・バイアスは、長い間に我々の間に培われてきたものでもあります。それを、意識的に無意識の心から引っ張り出すことは、きわめて難しいと思います。

しかし、このアンコンシャス・バイアスを修正していかなければなりません。男性にもいろいろな形があり、他人から「男らしさ」を強要されたくないという人もいます。これは、いわゆる「男らしい」人がダメだという意味ではなく、「男らしさ」を他人に強要することをしないということです。

社会の状況を見ると、企業がアンコンシャス・バイアスをなくす研修を取り入れ始めています。これは、モチベーションの低下や職場のコミュニケーション不足に陥るからです。コミュニケーションの在り方を考えるうえでも、相手の立場に立って考えるということが重要になってきます。

終わりに

これからの時代は、一人ひとりがそれぞれの考えを持ち、自分で悩んで考えて、意思決定をしていく時代です。

多様性を認め合う社会を推進していくために、それぞれがアンコンシャス・バイアスを自分の中から取り出し、修正していかなくてはなりません。特に、「男性を変革しないと社会が立ちゆかなくなっている」（朝日新聞２０２０年９月28日夕刊 岩手大学 海妻径子教授）のではないだろうかと思います。

注：アンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み） 誰もが潜在的に持っている思い込みのこと。育つ環境、所属する集団の中で無意識のうちに脳にきざみこまれ、既成概念、固定観念となっていく。（内閣府　第5次男女共同参画基本計画　用語解説）

コラム

「生きづらさ」と“特権”の狭間に

清田　隆之 さん
（文筆業／恋バナ収集ユニット「桃山商事」代表）
これまで1,200人以上の恋愛相談に耳を傾け、「恋愛とジェンダー」をテーマに幅広いメディアに寄稿。
著書『よかれと思ってやったのに―男たちの「失敗学」入門』（晶文社）　『さよなら、俺たち』（スタンド・ブックス）、桃山商事『どうして男は恋人より男友達を優先しがちなのか』（イースト・プレス）

男らしさの問題について考えたとき、ふと「男性は生きづらいのだろうか？」という疑問がわいた。もちろん困難を抱えている男性はたくさんいるし、男性ゆえに直面しがちな問題もいろいろあるはずだ。だから「男性の生きづらさ」自体を否定したいわけではない……のだけれど、この問題とどう向き合えばいいのか、よくわからないという感覚が正直ある。

ここ数年は男性からの相談も増えていて、自分が双子の親になってからは子育て中の男性から身の上話を聞くことも多い。ここでは見聞きしてきたエピソードや私自身の経験などを参照しながら「男性の生きづらさ」について考えてみたいと思う。

そもそも生きづらさとはなんだろうか。心身にまつわる不調や不具合、環境や制度との不一致、人間関係で起こる諸問題など、それは個々人が抱える困難のことを指す言葉であり、生きづらさの要因は自分の内側にも外側にも存在している。それらが複雑に絡まり合って構成されているわけだが、とりわけジェンダー、つまり文化的・社会的に形成された性差によって生じている困難にフォーカスしたものが〝男性の〟生きづらさとなる。

例えば子煩悩を自認するアラフォー男性のNさんは、子育ての主体が「母親」とされている風潮に違和感を覚えていた。自分は妻と同じくらい子どもの世話をしている。なのに子育てにまつわるものはほとんど〝ママ向け〟だし、「母子手帳」という言葉も「父」が無視されているような印象で気に食わないとNさんは語っていた。

共働きでふたりの息子を育てているYさんは、妻の機嫌を取ることに必死だという。昔から釣りが大の趣味だったが、子どもが生まれて以来ほとんどできなくなり、それがストレスになっている。「でも妻の機嫌を損ねないよう、週末は家族サービスに充てています。早く子どもに釣りを教え、海や川へ一緒に出かけたい」と嘆くように話していたのが印象的だった。

外資系企業に勤めるSさんは、いわゆる〝一家の大黒柱〟を担っていた。給料はいいがとにかく激務で、毎日帰りも遅い。40歳を過ぎたあたりから段々と仕事がしんどくなってきて、できることならもう少しゆったり働ける会社に移りたいが、家には3人の娘がおり、家や車のローンに加えてこれから受験などでますますお金がかかってくるため、しばらく激務に耐えるしかないとSさんは語っていた。

子育てをめぐる環境や風潮は母親仕様にできている部分があると思うし、家庭内の空気が悪くならないようやりたいことを我慢している男性の話もよく聞く。稼ぎ手としての責任ゆえ、つらくても仕事から逃れられない男性も少なくないはずだ。彼らはそれぞれ切実に悩んでいたし、背景には「男は仕事、女は家事育児」という伝統的な性別役割分業や、その中で形成された意識や習慣が深く関与しているはずで、確かにこれらは「男性の生きづらさ」と言えるかもしれない。

しかし、事情を掘り下げて聞くと徐々に複雑な気分になってくる。Nさんが子ども好きで積極的に関わろうとしていることに嘘はないと思うが、家事全般は妻が担当しており（共働きなのに……）、さらに「潔癖症なのでうんちのオムツは替えたことがない」と言っていた。Yさんにとって釣りに行けないことは確かにストレスだと思うが、妻がなぜ不機嫌になりがちなのかに関してあまり理解していない様子だった。Sさんにしても、稼ぎ手としてのプレッシャーは相当なものだと思うが、「出張中に夜の街で飲むことが唯一の楽しみ」と語る姿には違和感しかなかった。

苦手なことを回避できてしまうのも、休日に家族と過ごすことを〝サービス〟と言えてしまうのも、既婚者でも気軽にハメを外せてしまうのも、おそらく「男性だから」だ。女性だったら同じようにはいかないだろう。そこには圧倒的な男女の非対称性が存在している。子育てをめぐるすべてがママ向けになっているのは母親が担っている割合が圧倒的に多いからだし、その分だけ父親に課せられたハードルは低く設定されていて、うんちのオムツ替えをパスできているのもそれと無関係ではないはずだ。そこから目を逸らし、「子育て＝母親という風潮に違和感」などと嘆くのはどうなのだろうか。これが示すように、我々のまわりには非対称性に根ざした有形無形の〝男性特権〟が漂っており、それらと裏表の関係になっている構造こそ、「男性の生きづらさ」にまつわる複雑さや語りにくさの核心ではないか……。

もちろん私自身も男性であり、決して他人事ではいられない。現実問題として抱いている苦しさやモヤモヤはそのまま抑圧せずに言語化していきつつも、背後に張り付いているかもしれない男性特権についても真摯に学び続けていく――。「男性の生きづらさ」を解体していくためには、そういった姿勢が必須なのではないかと私は考えている。口で言うほど簡単なことではないだろう。しかしその先には、生きづらさをシェアし、対話やコミュニケーションによってそれらを乗り越えていけるような、みんなにとって優しい世界がひらけてくるように思うのだ。

子育てにおける「男らしさ」とは？

インタビュー

弁護士　太田 啓子さん

弁護士。離婚・相続等の家事事件、セクシュアルハラスメント・性被害等の民事事件を主に手掛ける。明日の自由を守る若手弁護士の会（あすわか）メンバーとして「憲法カフェ」を各地で開催。著書に「これからの男の子たちへ」（大月書店）がある。

Q男らしさ・女らしさについてはいつ頃から意識していましたか？

太田　子どもの頃から「男らしさ」「女らしさ」の押しつけに違和感があって、反発していました。中学生の頃、理科の授業で先生が洗濯物がよく乾く条件を質問し、皆答えられなかったときに「女の子もわからないの？」の言葉にカチンときたのを覚えています。

Qそうするとアンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み）に中学生の時から気付いていたんですね

太田　当時、私の中にもバイアスはあったと思います。なぜか、男の子には、乱暴に接してもいいような気がしていて、当時ピアノを習っている男の子を「似合わない」みたいにからかったら、後でその子のお母さんに怒られました。これは非常にいい経験だったと思っています。

社会にも、男の子に対しては、女の子に比べデリカシーのない扱いをしても良い、男の子はそんなの気にするな、という感覚があるかと思います。でも、繊細な男の子が自分の良さを肯定しづらい空気は良くないし、デリカシーのない扱いに慣れさせられてしまったら、他者に丁寧な配慮ができなくなるかもしれないですよね。

Q男の子を育てる時にどのような点に注意したらよいですか？

太田　2点あります。まず1点目は、古典的な「男らしさ」の枠にはめないほうがいいと思います。たまたま、その子の個性がいわゆる「男らしさ」に多く一致することもあるでしょうから、個性を変えようとしなくていいですが、大人の側で意識的にいろんな選択肢を用意して、男の子だからという理由で「男の子っぽいもの」ばかりではなく、いわゆる「男らしさ」とは離れた遊びや本などにも触れる機会も作る工夫をしたらいいと考えています。「男らしさ」に意識的にはめ込まないということです。

もう1点は、一人の市民として社会への責任を果たそうとする大人に成長してほしいと思います。その際、自分が持っている属性を活かしてできることを意識してほしいです。性差別構造においてマジョリティ側である男性こそが声をあげる意味はとても大きいので、たまたま男性という属性を持っていることを活かして、性差別解消というテーマについて、当事者意識をもって主体的に動けるような大人の男性に育ってほしいです。どんな問題に対しても、自分がたまたまにせよ持っている属性を生かしてできることがあるなら、それをやろうと考えられるように子育ての過程でも伝えられたらと思います。

Qその他には何か子育てで気を付けていることはありますか？

太田　女の子には性被害に遭わないよう自衛策を教える大人は多いですよね。でも男の子も被害に遭いますし、加害者的発想の萌芽になるような感覚を植え付けられないようにも意識しています。自分も他人も尊重する人権感覚を持たせたいです。

本来は学校でユネスコの国際セクシュアリティ教育ガイダンス（※注1）に基づく包括的性教育（※注2）を受ける機会を与えてほしいですが、今はそうではないので、各家庭で補う工夫をする必要があります。近い将来、学習指導要領に包括的性教育をカリキュラムとして位置付けられるといいと思います。性教育は最近注目が大きく、関連書籍もよく売れていますね。

Qテレビや漫画などの男女不平等についてはどのように対処したらよいと思いますか？

太田　子どもが触れるコンテンツには、ジェンダー平等を意識したものが増えてきています。しかし、そうでないコンテンツに対しては、子どもにリテラシーを持たせることが重要だと思います。親は全てをコントロールしきれないので、子ども自身に考える力をつけさせたいですね。子どもは、周りから教わっていく中で自分で判断できる能力を養っていきますから。

例えば、男の子向けとされる漫画など

に、女性の意に反する性的接触という場面が、「ちょっとエッチな笑えるネタ」として描かれるようなことが気になります。それだけで作品を全否定はしませんが、本来、特に子ども向けの作品では、現実には性暴力になるような行為の描写を「エッチな冗談」と扱うべきではないと思います。「エッチな冗談」を加えてもいいけれど、性暴力をそのように扱わないで、ということですね。

現実にはそういう描写に子どもが接することはあるので、これは性暴力であること、性暴力を冗談のネタとして扱ってはいけないこと、あなたたちではなく、考えていない大人に怒っているのだということを伝えています。

Qなぜ今、「男らしさ」が話題になっているのでしょうか？

太田　1975年に世界女性会議（※注3）が開催され、1970年代以降、世界は性差別を解消しようと具体的に動いてきたのです。それまでは多くの外国でも社会には男女不平等が多くあり、今も完全には無くなっていませんが、70年代と比べれば大きく変わった国がたくさんあります。しかし、日本は各国と比べてどんどん取り残されて今や性差別後進国です。政治家や企業の管理職など、組織の重要な意思決定に関わる場所が圧倒的に男性ばかりだという状況です。男女の賃金格差も大きく家事や育児が女性に偏る構造も根深く残っています。

しかし現在、性差別や性暴力に声をあげる人は確実に増えています。

少しずつ性差別解消に向かっているとは思いますが、速度が遅すぎます。重要な意思決定のポジションは、早く若い世代に交代した方がよいと思います。

Q無意識の内の男女不平等観はどうしたらなくせると考えますか？

太田　変だと感じた人が、それぞれの立場で実践していくしかありません。夫婦間でも疑問に感じたら言葉で伝えることが大切です。すぐには変われなくても、努力さえせず、このままでいいと思っている男性は女性にパートナーとして選ばれなくなると思います。

そういった男性と離婚したいと思っても、経済的な問題で離婚できない女性には法律相談でよく会います。女性が自立し、自立した女性を尊重する男性をパートナーとして選ぶようになれば、自然と男性も変わっていくのではないでしょうか。

女性が誰かに経済的に依存しないと生活していけないという状況は、暴力の温床になりやすいと思います。DV夫は、自分の経済力がなければ妻は生活できないということがわかっているので、傲慢な態度をとっていることが多いです。

私が弁護士として離婚事件を扱っていると、カップルが互いに対等な関係を維持することの難しさをよく感じます。経済的に優位な方が、無意識に、劣位の方を「下」に見て傲慢な態度をとることはよくあります。男女は対等だという意識は家庭内でこそ重要です。

Q子育てで大切なことは何でしょうか？

太田　私が何か間違ったことをしたら、それを認めて子どもに謝り、理由も言葉にして伝えることは意識しています。「非を認められない」ということは弱さだと思うので、認める強さを親がまず見せるようにしています。

弁護士の立場で見る男性の問題行動の根底には、自分の加害性・暴力性を認められない、間違ったことを謝れないということがしばしばあります。人は間違うこともありますし、それを認め改めようとすることは、人間としての強さ、成熟ですよね。それをできる勇気をもてるようになってほしいです。

Q母親と息子の関係性についてどのように思いますか？

太田　『「母と息子」の日本論』（品田知美　亜紀書房）という本で、著者が、息子の幼さを許容する母親のありようの問題を鋭く指摘しています。私の本でも「男子ってバカよね」と母親が言い合うことの問題を書きました。「バカだからこそ可愛い」みたいな言い方は危ういとこの本を読んで改めて感じさせられました。

注1：国際セクシャリティ教育ガイダンス　ユネスコが中心となって作成した性教育を進めていくうえで世界のスタンダードとして定評のある手引き

注2：包括的性教育　ジェンダー平等や性の多様性を含む人権尊重を基盤とした性教育（公益財団法人日本女性学習財団）

注3：世界女性会議　女性の地位向上を目的に開催される世界会議

取材を終えて

男の子をどう育てていくかということは、これからもっと重要になってくると思います。母親代わりの女性を求める未成熟なままの男性ではダメではないでしょうか。

（佐藤）

小金井で働く

オーブン・ミトン

小嶋 ルミさん

日本全国、海外からもお客さんがやってくるケーキと焼き菓子のお店「オーブン・ミトン」。そのお菓子は、見た目やレシピはシンプルなのに他とは違う美味しさが味わえます。その秘密は「生地」にあり、上質な素材でオーブン・ミトンならではの技で練りこまれたレシピと技術で作られます。今回は、オーナーパティシエである小嶋ルミさんに話を伺いました。

◆オーブン・ミトンと現在の活躍

女性パティシエの草分けと最近よく言われます。今年で開業してから32年になります。途中の10年は『はけの森カフェ』として中村研一記念小金井市立はけの森美術館の隣で営業をしていました。よくこれまで続けてこられたものだと自分でも思います。地元・小金井のお客様に長年来ていただけたことと、ミトンの味を目指して修行し、支えてくれたスタッフがいたこと、それがお店を続けてこられた最大の理由です。

開店2年目からお菓子教室も開催していて、生徒さんは全国から集まり、これまで参加していただいた方は1000人を超えています。最近では中国の生徒さんも増え、上海で定期的にレッスンしています。今はコロナで行けませんが。昨年は、ベルチャイナというクリームチーズメーカーのアドバイザリーも任され、中国と日本のお菓子交流に努めました。

出版した本は10冊を超え、昨年の新書「おいしいクッキーの混ぜ方」では、ミトンの焼き菓子を余すところなく披露しています。私はレシピを隠さず教えるというところに定評があり、そこに熱心なファンがついています。家庭のお菓子作りにも役に立つ、プロだからできることを日々考えています。

◆パティシエを目指したきっかけ

26歳で料理人の夫と結婚し、二人で将来レストランを持った時に自分はデザートを担当できればと、その年に夜間の製菓学校に通い始めました。

お菓子を作るのは小さい頃から大好きで、本を見て作っては周りの人にあげていました。小学校5年生の誕生日に、上置きオーブン（ガスコンロの上に置いて使う天火）を買ってもらったことをよく覚えています。大学生になって一人暮らしでも、小さなオーブンでお菓子を焼いていましたが、お菓子屋さんになろうとは全く思ってもいませんでした。

プロになるには、まずは現場で働くことが必要と、ケーキ屋で修業するために何件かのお店にアタックしました。しかし、女性はなかなか厨房に入れてもらえず、仕事内容も限られていました。やっと入れたアルバイト先は、ウイーン菓子で有名なシェフのお店でした。夜に製菓学校へ通いながら1年間働きました。下働きが主でしたが、それが私の仕事の基礎になっています。

同時期、農工大通りにその当時はまだ珍しかった天然酵母のパン屋さんが開店し、店主の方と交流し始めました。2年足らずでそのお店が閉店することになり、その後やってみたらと勧められ、ケーキ屋として引き継ぎました。今思えばその店主の一言で私のケーキ屋人生が始まってしまったのです。

◆オーブン・ミトン開店時の苦労

当時女性パティシエは珍しく、女性のお店は半人前としか見なされませんでした。店構えも小さく、修行も短く、前歴が無いこともありましたしね。その後、お店の定休日に自分が美味しいと思ったケーキ屋やレストランに日帰りで修業に行ったりと、研究を重ねました。そして、これなら行けるというシュークリームが完成しました。オープンから2年目です。初めて自信をもって食べてもらえると感じたのと同時に、「もっと多くの人に食べてもらいたい」という思いがわき出て、『オレンジページ』に投稿したところ、お店が掲載されました。すると近所だけでなく国分寺、三鷹からもお客様に来ていただけるようになりました。また、そのすぐ後にテレビの取材もあり、遠くからのお客様も増えていきました。

小金井の人々が小金井のお土産として持って行って頂けるお店にしたいと、その時からずっと思ってやっています。

◆パティシエの働く環境

女の子のあこがれの仕事の上位にあるパティシエですが、実態は、きつい、厳しい、給料が安いという職業でもあります。これは決して大げさな表現ではありません。当時ケーキ製造は、女性には開かれていない職場でした。今は女性のパティシエもたくさんいますが、1日の労働時間は長く、体力的にもしんどい仕事です。製菓学校を出て、2～3年は頑張れても、その後洋菓子業界に残る女性は数少ないのが現状です。

私のお店では、スタッフは全員女性です。長く働いてもらいたいので、きっち

りと週休2日にし、夏休みと正月休みも長くしています。入社し、1～2年は先輩から技術を教わり、その後2年はお店の戦力となり、5年目には自分が教わったように後輩に指導して、借りを返す。という気持ちでスタッフに仕事をしてもらっています。

ミトンを卒業し、独立してお店を持つ者もいます。ベテランスタッフが辞めて、次のスタッフが育つ。ミトンの混ぜの技術はすぐには覚えられません。一つの混ぜをマスターするのに早くても半年、長い人は1～2年かかります。その技術を教えるのは私の役目です。スタッフが力をつけていき、いつか自分のお店を持つ時の味の基本、技術の基本になってくれればと思いながら30年続けています。

去年、シュークリームがテレビで紹介されてから、これまで以上に多くの方に来ていただけるようになりました。スタッフも忙しさの中、一丸となってお店の味を落とさないよう頑張っています。初めてミトンを知り、初めて出会う美味しさを体験し、新しいお客様が生まれる。お店っていうのはその繰り返しなんです。

◆こだわりの焼き菓子・ケーキ

発酵バター、砂糖、卵をよく泡立て、粉を合わせて、180回丁寧に混ぜてミトンのパウンドケーキができます。その混ぜ方がミトンの秘技で、他のお店にはない技術です。それは長年の経験から徐々に生まれ出たものです。サラサラ口どけのクッキーや、ふんわりとしたシフォンケーキ。どのケーキにもこだわりの混ぜ方があり、それを一番に大切にしています。

お菓子の研究を兼ねて海外へよく出かけます。最近流行っているバスクチーズケーキもその一つです。6年前、スペインのサン・セバスチャンでレシピを取得し、その後すぐに販売していました。ブームになる前です。NHKから『『きょうの料理』用にバスクチーズケーキのレシピを作ってくれませんか』と言われ、昨年11月に出演が決まった時は、「やったー！」と思いました。

材料は自然素材から作るように心がけています。業務用の副材料には添加物が含まれている物が多く、それを使うと不自然な味がしてしまいます。「体が欲する美味しいものは、自然からしか生まれない」というのが私の信念です。

◆夫の協力

フレンチシェフの夫からのアドバイスが、多々役に立っています。シュークリームのカスタードを、味が濃くなるように煮詰めてみろと言ったのも夫です。ケーキ業界の壁にとらわれず、素材に向き合う大切さを教えてくれました。またお店の経営も、夫の賛成が得られないことはしない、という方針でやってきました。夫の料理について私は踏み込まない。お菓子については、私に全部まかせてもらっています。

◆仕事をしながらの子育て

女性パティシエでも結婚は可能です。しかし、出産でお店を休むということは決断がいることです。男性のオーナーが多い職場ですので、復帰が難しいのかもしれません。私はもうこれが最後という高齢で出産し、産後もすぐに現場に戻ることができました。夫の母や姉、親戚など周りに子育てをやってくれる人がいて、恵まれていました。

また、娘の成長に合わせて自分の仕事の時間を短くしたり、お店の場所を『はけの森』に変えたり、その時は夫やスタッフに任せたりと、働きやすく変えてきました。衣食住が仕事場と隣接していることはとても良いことだと思います。

◆今後のお店の展開について

私も夫もそろそろ退職を考える年齢に近づいてきました。お客様に喜んでいただくこと、お客様の「ミトンがいちばん美味しい」の一言を聞くことが仕事の原動力としてここまでやってきました。今と同じ規模では体力的にも難しいため、規模を小さくするなど、現場でお菓子作りを続けていく方法を考えています。教室運営のノウハウも今後大いに役立ちそうです。

取材を終えて

「手土産に持っていきたいお菓子」ランキングの1位にオーブン・ミトンのフィナンシェが載っていたのがキッカケでそれから毎週通っていました。そんな中で、働いている女性スタッフの方々が生き生きしているのをいつも感じていました。きっと小嶋ルミさんがそういうお店の雰囲気を作っていらっしゃるんだと思います。（山本）

第34回 こがねいパレット

ダメでいい、ダメがいい。

ーありのままを認めれば子どもたちは最高に輝くー

講師：井本陽久（いもと はるひさ）さん（花まる学習会「いもいも」主宰、栄光学園数学科講師）

令和２年 11 月８日（日）に第 34 回こがねいパレットを開催しました。

今回は、教育分野で活躍されている講師に、子どもたちとの関わり方や居場所づくりについてお話しいただきましたので、その一部をご紹介します。

こがねいパレットは、公募の市民実行委員が企画・運営しています。
第34回こがねいパレットの詳細は「記録集」をご覧ください。市ホームページにも掲載しています。

第34回こがねいパレットポスター

「できる」「できない」で評価しない

学校では、「できる」「できない」でどうしても優劣をつけてしまいがちです。しかし優劣を子どもたちに使うと、子どもたちは、「劣」の子はダメなんだと思ってしまいます。子どもたちは、本当はものすごく協力的で、平和的です。でも、大人が「やりなさい」って言ったことをできない子はダメなんだという流れを作り、先生が何かできない子を批判的に見てしまうと、子どもたちもダメなんだと思ってしまい、からかう感じになっていきます。そうなると子どもたちは、あらゆることを自分で判断しない方がいいとなってしまいます。

安心感のある居場所

子どもたちが本当に必要なのは、自分のままでいられる安心感です。そのためには、子どもたちが「生き生きしているか」、あるいはそういう居場所があるかが大事です。自分のままでいられる、その安心感さえあれば、勝手に伸びていくし、自分の道を進んでいくのです。それを信じるということが大事です。

ありのままを認める

自分で自分のことを決めるということをたくさんしてきた子や、自分のやり方でやるという経験の総量がたくさんある子は、どういう人生だから幸せだとか、どういう人生だと不幸だということを軽く超えていくんです。

僕が大事にしていることは、子どものいいところを引き出そうとするのではなくて、その子の持っているものをそのままの価値として認めることです。

子育ては、子どものためじゃない

子育ては自分を見つめるチャンスです。親はその子と縁あって出会ったのです。その子育てを通して自分が変わっていきます。この子に何かしてやろうと思っても、それは大体うまくいきません。そうなるとコントロールしたくなるし、必ず何か不自然になります。

子どもを変えるのではなく、子どもを見る大人の心を変える

人間の根本には、何かができなければ価値がないという、不安や恐れを持っているので、優劣をつけたがります。

でも、子どもは、その子のままでダメなはずがないのです。その子はそこにいるのだから、ジャッジ（判断）する意味はありません。そのまま見ればいいのです。

つまり、子どもを変えようということでなくて、子どもを見る大人の心を変えようということです。

ありのままで居られる場所が必要

実は大人こそ、ありのままを認められることが必要な人がたくさんいます。しかし、社会人になった途端に、大人なんだからということでその機会を失ってしまいます。本当は子どもよりも大人の方が、そのありのままで居られる場所が必要ではないかと思います。

こがねいパレットに参加して

井本先生の講演をお聞きして「失敗することの大事さ」「自分のやり方、考え方で決めることの大切さ」ということが響きました。

自分のやり方で失敗したら、どうしたらいいか本気で考えることで、そこに新しい創造が始まります。答えが正しいかどうかが重要ではなく、自分で創造することが重要です。

昭和世代は「先生が言うことは絶対」みたいなものが染み付いています。だからこそ、自分の中にある「子どもの視点＝違和感」を大事にすることだと思います。（山本）

東京しごとセンター多摩

女性しごと応援テラス の紹介

多摩ブランチ

東京しごとセンター多摩では、結婚・出産・育児・介護等の事情で離職した女性や家庭と両立して働くことを希望する女性の方を対象に、しごとに関する相談窓口として、令和2年10月に『女性しごと応援テラス多摩ブランチ』を立川にオープンしました！

女性しごと応援テラス　多摩ブランチとは

結婚・出産・育児・介護等の事情で離職した女性や家庭と両立して働くことを希望する女性の方を応援する専用窓口です。「子育て中のため何から始めていいかわからない」「ブランクが長く仕事についていけるか不安」「子どもの預け先が決まっていない」「介護をしながら働きたいが不安」など色々な悩みがあると思います。働きたい気持ちがあっても、どうしたらいいかわからなくて一歩が踏み出せない、そんな女性の再就職をサポートします。

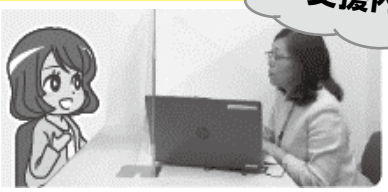
多摩地域の市町村やマザーズハローワーク等とも連携しています。

小金井市でも毎年１２月頃に“女性のための再就職支援セミナー”を開催しています。

支援内容

相談コーナー（キャリアカウンセリング）

担当アドバイザー制で皆様のご相談にきめ細やかに対応し、就職活動をサポートします。何から始めればいいか・・・など一緒に相談していきましょう。



情報コーナー

求人情報の検索や応募書類の作成ができるパソコンをご用意しています。地域の保育園情報もご自由に閲覧いただけます。

授乳室

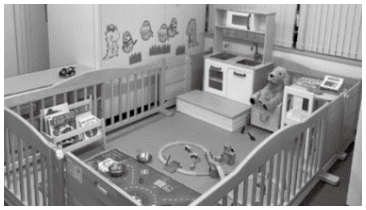
ベビーベット(オムツ交換台)があります。必要なかたはどなたでもご利用いただけます。

就職活動に関するセミナー

館内で行うミニセミナーや、多摩の各自治体で行うセミナー、パソコン講座等を開催しています。(託児付有・要予約制)

キッズスペース

お子様を連れてご利用いただけるよう、
キッズスペースを設置しています。
サービスを受けられる際にご利用ください。
見守りサービス※要予約・無料
保育士による見守り（※託児ではありません）
条件有、要問合せ



【利用時間】月～金曜日　９：００～１７：００
土曜・日曜・祝日・年末年始（12／29-1／3）はお休みです。
【住所】東京都立川市曙町2-34-13　オリンピック第3ビル2階
【TEL】042-529-9001

しごたま　検索

小金井市パートナーシップ宣誓制度

令和２年10月に始まりました！

小金井市では、多様性を認め合い、人が人として尊重され、誰もが自分らしく生きることができる地域社会の実現を目指し、多様な性自認や性的指向を持つ性的少数者の方への理解を進めるため、令和２年１０月２０日にパートナーシップ宣誓制度を開始しました。

■ 宣誓の対象となる方の要件

宣誓をすることができる方は、次の全ての要件を満たしている方です。

①パートナーシップにあること
②宣誓日当日において成人であること
③双方が小金井市内に住所を有し、または宣誓日から3か月以内に市内に住所を有することを予定していること
④双方に配偶者（婚姻の届出をしていないが事実上婚姻と同様の関係にある方で同居している場合を含む）がいないこと
⑤双方が宣言をしようとする相手の他にパートナーシップの関係にある方がいないこと
⑥直系血族または三親等内の傍系血族、もしくは直系姻族の関係でないこと

※詳しくは、市ホームページや市役所にあります「小金井市パートナーシップ宣誓制度の手引き」をご覧ください。

■ 手続きの流れ

①日程調整
提出される日時を調整するため、7日前までにご連絡ください。

②宣誓
必要書類の提出とご本人確認をいたします。

③受領証交付
お二人それぞれに受領証と受領カードをお渡しします。

○ 性自認とは

性自認とは、自分の性をどのように認識しているのか、どのような性のアイデンティティ（性同一性）を自分の感覚として持っているかを示す概念です。「こころの性」と呼ばれることもあります。多くの人は、性自認（こころの性）と生物学的な性（からだの性）が一致していますが、この両者が一致しないための違和感があったり、からだの性をこころの性に近づけるために身体の手術を通じて性の適合を望むことさえあります。

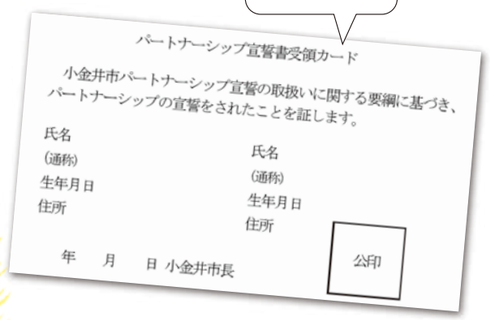
○ LGBT とは

Lesbian＝レズビアン（女性同性愛者）、Gay＝ゲイ（男性同性愛者）、Bisexual＝ バイセクシュアル（両性愛者）、Transgender＝トランスジェンダー（生まれたときに法律的／社会的に割り当てられた性別にとらわれない性別のあり方を持つ人）、これらの頭文字をつなげた言葉です。

パートナーシップ宣誓制度とは？

お互いを人生のパートナーとし、相互の協力により、継続的な共同生活を行い、または継続して共同生活を行うことを約束した、一方または双方が性的少数者（多様な性自認または性的指向を持つ方をいいます。）である二人が、市長に対しその関係を誓い、その内容が要件を満たしていると認められたときに、『パートナーシップ宣誓書及びパートナーシップの宣誓に関する確認書受領証』と『パートナーシップ宣誓書受領カード』が交付されるものです。

受領カード


パートナーシップ宣誓書受領カード
小金井市パートナーシップ宣誓の取扱いに関する要綱に基づき、パートナーシップの宣誓をされたことを証します。
氏名
（通称）
生年月日
住所
氏名
（通称）
生年月日
住所
年　月　日 小金井市長
公印

市民・事業者の皆様へ

この制度は、性的少数者の方の抱える生きづらさを解消し、多様性への理解を促進していくための制度であり、また、性的少数者の方が互いを人生のパートナーとして共に生活していきたいという気持ちを受け止めるための制度です。

また、この制度は法律上の効果が生じるものではありませんが、この取組の趣旨を市民や事業者の皆さんにご理解いただけるように取り組んでいきます。

■ アウティングは禁止！

本人の了解を得ずにその方が公にしていない性自認や性的指向を第三者に伝えてしまうことをアウティングと言います。アウティングは重大な人権侵害です。「良かれ」と思ったことでも、本人の同意なく第三者へ伝えることは絶対にやめましょう。

○ 性的指向とは

性的指向とは、人の恋愛･性愛がいずれの性別を対象とするかを表すものであり、具体的には、恋愛･性愛の対象が異性に向かう異性愛、同性に向かう同性愛、男女両方に向かう両性愛を指します。

○ SOGI（ソジ／ソギ）とは

Sexual Orientation（性的指向）とGender Identity（性自認）の頭文字をとったもので、ソジまたはソギと言います。セクシャリティは一人ひとり異なり、LGBT という言葉だけでは包含できないほど多様な性のあり方が存在します。このため、「性的指向および性自認」という全ての人が持っている概念を表す言葉として使われています。

かたらい 2021 53号

小金井市男女共同参画情報誌『かたらい』第53号　2021年（令和3年）3月発行／企画・編集：かたらい編集委員会
発行：小金井市企画財政部企画政策課男女共同参画室　TEL：042-387-9853　FAX：042-387-1224
編集委員：佐藤百合子　山本紘衣　男女共同参画室／監修：高橋道子（東京学芸大学名誉教授）

『第5次男女共同参画行動計画　―令和元年度 推進状況調査の報告について―』

■計画の概要

市では、男女共同参画社会の実現のため、平成２９年３月に第５次男女共同参画行動計画を策定しました。

本計画は、計画期間を平成２９年度～令和２年度とし、基本理念を「人権尊重とワーク・ライフ・バランスを軸とする 男女共同参画の実現をめざして」と定めています。

この基本理念を具体的に推進していくため、基本目標Ⅰ「人権が尊重され、多様性を認め合う社会をつくる」、基本目標Ⅱ「ワーク・ライフ・バランスの実現した暮らしをめざす」、基本目標Ⅲ「男女共同参画を積極的に推進する」と、3つの基本目標を掲げています。

■令和元年度推進状況調査結果

基本目標Ⅰでは60事業、基本目標Ⅱでは35事業、基本目標Ⅲでは14事業、合計109事業の実施内容等について調査しています。

○具体的な取り組み

〈審議会等女性の参画推進〉

男女共同参画社会の実現のためには、女性が政策・方針決定の場へ参画することが重要です。

また、審議会等の委員構成は、男女に偏りがないように配慮することが必要です。改選時には、できるだけ女性委員の登用を図るなど、様々な分野へ女性の参画の促進に努めています。（表１）

〈男女共同参画情報誌「かたらい」発行〉

男女共同参画施策の推進のため、市民編集委員制を導入し、情報誌「かたらい」を発行しています。

令和元年９月発行の第５０号では、特別企画「人生１００年時代　あなたもライフコースについて考えてみよう」、令和２年３月発行の第５１号では、特別企画「小金井市名誉市民　毛里和子さんインタビュー」・特集「子どもの視点から男女共同参画を考えてみよう」などを掲載しています。

今後も、市民に男女共同参画に関する情報を発信し、意識啓発を図っていきます。

〈こがねいパレット〉

男女共同参画社会実現のための啓発事業として、講演会等を市民実行委員が企画・運営しています。

令和元年１１月２４日に開催した第３３回こがねいパレットでは、「Ｉｔｓ　笑（ショー）　タイム！！ 笑いで吹き飛ばせ　暮らしのモヤモヤ」をテーマに漫才や、こがねいパレットに賛同する市民団体の紹介・展示等を行いました。

「こがねいパレット」は、「いろんな色を持つ、いろんな人たちが自分の色を大切にして、出会い、交流し、それぞれの色を認め合い、ときには、いくつかの色がまざりあって、新しい色を織りなしながら、誰もが楽しく幸せに暮らせる豊かな社会をつくりだそう」という願いが込められています。

■男女平等推進審議会からの提言

令和３年３月に、市の附属機関である男女平等推進審議会から、本計画の推進等について提言をいただきました。

提言書に記載されている意見（一部抜粋）

▽令和元年度実績に対する評価及び報告書について

■その他

報告書および提言書は、情報公開コーナー（市役所第二庁舎６階）、図書館本館、企画政策課男女共同参画室（市役所本庁舎２階）および市ホームページで閲覧できます。

（表１）　議会・行政委員会等女性の参画率

議会・行政委員会等 ＼ 人数等	小金井市 ※令和2年4月1日現在				多摩26市 ※令和2年4月1日現在				東京都 ※平成31年4月1日現在 ※議員数は令和2年7月7日現在			
	機関数	総　数	女性の人数	女性比率	機関数	総　数	女性の人数	女性比率	機関数	総　数	女性の人数	女性比率
議　　会	－	24	9	37.5%	－	754	209	27.7%	－	127	37	29.1%
行政委員会（教育委員会ほか）	6	31	7	22.6%	196	1,068	175	16.4%	9	91	15	16.5%
附属機関（男女平等推進審議会ほか）	46	567	184	32.5%	1,110	14,626	4,204	28.7%	52	662	219	33.1%
その他審議会等（行財政改革市民会議ほか）	16	170	65	38.2%	899	13,103	4,958	37.8%	162	1,649	516	31.3%
管理職の在職状況	－	65	11	16.9%	－	2,878	506	17.6%	－	3,413	684	20.0%

「かたらい」について読者の方から意見・感想等を募集しています。

氏名（ふりがな）、ペンネーム（記載がない場合はイニシャルとします）連絡先を明記し、直接、郵送またはファクスで企画政策課男女共同参画室へご提出ください。※一部抜粋して掲載させていただくことがあります。

〈提出先〉　〒184-8504 住所不要　企画政策課男女共同参画室共同参画室　FAX：042-387-1224

編集後記

人々が無意識のうちに持っているものに焦点を当てようということは非常に難しいと思います。しかし、いつまでも日本の男女平等が進まないのは、この「無意識の偏見」があるからであると、明確にわかってきました。無意識の偏見には何があるのかを明確にしていき、これを無くすことが重要と思います。

（佐藤百合子）

編集会議を通し自分の固定概念に気づき、そこから「これからどういう男女共同参画社会をつくりたいか」と考えるよい機会になりました。ありがとうございました。

（山本紘衣）

今号では「『男らしさ』について考える」をテーマに特集を組みました。今号を通して、『男らしさ』について改めて考えるきっかけになればと存じます。インタビューやコラムを執筆いただきました皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

（男女共同参画室）

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。

古紙を配合しています。